

# AFTERNOON TEA

大分大学 医学部 循環病態制御講座

森島 真幸

## 「小さな喜び」

今回、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部統合生理学分野の近久幸子さんから [Afternoon Tea] のバトンを引き継ぎました。推薦者の近久さんとは徳島大学大学院博士課程時代からの友人です。今でもよく連絡を取り合い、彼女は私にとって良い刺激を与えてくれる貴重な存在です。現在私は、徳島から大分へ移り住んで2年目を迎えたところです。未だに学内で迷い、外に出れば道に迷い、特に大分の地名を言われるとさっぱり分らなくて話についていけないこともありますが、大分大学医学部構内は中庭もあってとても広々としているし、私が住んでいる大分市内もとても住みやすく気に入っています。

私が所属する、大分大学医学部循環病態制御講座(生理学第2)では、小野克重教授の元で助教として日々研究に励んでおります。研究室のテーマは心臓電気生理学とイオンチャネルです。特に最近では、心筋イオンチャネルの転写因子による発現制御機構の解明のために、分子生物学的、細胞分子生理学的手法を用いて実験に力を注いでいます。

ここからは研究の話とは外れますが、最近、今の自分についてよく考えます。初めての土地「大分」に移住し、大きく環境が変わり社会人として研究に励むことになってから、物事に対する考え方が少しずつ変わってきたような気がします。これは、研究に対してだけでなく日々の生活の中でも言えることで、自分の心境の変化に自分が一番驚いています。私はこれといった趣味は特に無いのですが、最近「小さな喜び」を感じる瞬間が好きで、他人から見たら「そんなことで!？」という数々の小さな喜びとの出会いに敏感に反応してしまいます。「小さな喜び」を発見するかどうかでそ

の一日が意味のある一日として過ぎ去るか、ただの一日として他愛なく過ぎ去るかが決まっています。例えば、ここ最近の「小さな喜び」との出会いは、車の走行距離が「77777」だったことを発見した瞬間から始まり、自宅で飼っている金魚達が(ただお腹が空いているだけかもしれませんが)私の帰宅を歓迎してくれた瞬間、イタリアでの学会中に入ったレストランで適当に指差して頼んだ料理が偶然にもイタリアの伝統料理だった瞬間。そして、PCR用プライマーを注文した際に、知る人ぞ知る金の箱に包まれ私の手元に届いた瞬間などなど。大抵が、ここに書き記すのが恥ずかしいほどで大した出来事ではないのですが、その瞬間には、おそらく私の頭の中では脳内ドーパミン神経系が活性化されているのでしょう。ただただ嬉しくて仕方がなくて、一気に気持ちが明るくなっていきます。そして、たったそれだけのことが私の一日の疲れを忘れさせてくれ、また明日への活力となっていきます。特に、プライマーが金のサンプルボックスに梱包されて届いた時には、しばらく興奮を抑えきれず、ちょうど台湾国立大学から1ヶ月間の短期留学生として来ていた呉さんに、一気に事情を説明して一緒に喜びを分かち合い、結局、教室の方々を巻き込んで記念写真まで撮ってしまいました(写真1枚目。左から、研究補助員の秋吉さん、研究員の王さん、呉さん、小野教授、森島)。冷静になれば、それはあくまでも、サンプルを保存するためのただの箱です。きっと、記念撮影にお付き合い下さった心優しい先生方は、「ただの箱」と思いながらも私の興奮振りに圧倒されてしまっただけだと思いますが、それでも楽しい思い出になりました。そして私だけでなく、呉さんも1ヶ月という短い期間に、実験技術を学ぶだけでなく、ほんの束の間の笑いの時間を共有することができて、良かったのかもしれ



写真1

ません。呉さんのお別れ会は、教室員が一人一品ずつ料理を持ち寄り、アット・ホームな雰囲気の中で行われました(写真2枚目)。私にとってはこのようなパーティは初めてだったし、何かのイベントが無い限り、教室の方々と集合写真を撮る機会はないので、これも貴重な一枚として、また楽しい思い出となりました。ほんの些細な出来事で喜ぶことができる自分は、おそらく単純な人種だと思います。しかし、これは研究をしていく上で大切なことで、いつか結果として反映される事ではないかと思っています。研究における「小さな喜び」との出会いは、滅多に無いことだと思いますが、だからこそそれは決して見逃すことができません。それが小さな発見だったとしても、他に



写真2

誰も興味を示してくれなくても、自分の興味がそこに向いている以上は、とことん前に進みたいと思います。物事にはきっかけが必要で、それが必ずしも楽しい結果にならなくても、やろうとする気持ちが大きな可能性を生むと信じています。学生の間は、目先の事しか見えず、大きな視野で周りを見ることができなかったことから「小さな喜び」に無関心な時期もありましたが、私は「小さな喜び」を感じられるように、日々アンテナを張って過ごすのは悪くないと思っているし、「小さな喜び」を大きな原動力に変えられるかどうかは自分の心掛け次第だと思います。これから10年、20年後にも、今の気持ちを持ち続けたいと思っています。

日本医科大学 生理学講座 (生体統御学)

原田 嘉夫

## 「温故」

加藤昌克先生(日医大・システム生理学)からバトンを受けました。最近、学会に出席していると、自分達の時代とはすっかり変わってしまったなァと思うようになってしまったので、現在では何の役にも立たないと思われるかもしれないが、自分の大学院時代について徒然に書いてみたいと思う。

大学院医学研究科に入ったのは昭和55年(1980

年)で、PCはまだ高嶺の花で、研究室にPCがあれば、金持ちの研究室と言われ、「科研費の申請書をPCを使って出すと、お金が充分あるとみなされて科研費があたらない」というような噂がまことしやかに流れていた。その時代のPCといえばNECのPC9801で、まだ16ビットであり、モニターは白黒、プリンターはドットプリンターの時代であった。

学会発表は口演主体からポスター発表主体への移行期であり、各教室2題のみ口演で、それ以外

はポスター発表であった。口演ではスライドを作るのであるが、今の様にソフトでお手軽に作れるわけではなく、ロットリングのペンを用いて一枚一枚手作りで仕上げなければならなかった。ロットリングのペンを使って直線をきれいに書くのは大変な仕事で、私は最初から完璧を狙わなかったが、ある教授が私が書いた直線をはすから眺めて、ゆがんでいると文句を言われた時はさすがにあきれた。英文抄録はタイプライターで打たれていたが、和文抄録は手書きであり、気のきいた研究室では和文タイプライターで打たれていた。ポスターの説明文は、英文の人はタイプライターで打った文を拡大コピーし、日本語の人は手書きであった。この手書きのメリットは、旅先の宿でも作ることが可能で、地方の学会でポスター発表者と相部屋になったおり、隣のベッドで一晩中電灯をつけポスターを製作された懐かしい思い出がある。以来、学会に行く時は必ずシングルルームと決めている。以上のようにあの時代の学会発表は、今みたいにパワーポイント（イント）を使って手軽に済むわけではなく、発表の準備にかなりの労力と時間、更に気力が必要だった。

あの当時、セミナーで時々聞く昔話が面白かった。例えば、昔は大きなコイルの中を磁石を通過させることにより、電磁誘導で神経を刺激したという話は感服した。機械といえば、故萩原成長先生（UCLA）がグレートバリアリーフでの実験のため、サンディエゴから電気生理のユニットを船に乗せ、はるばる運んだと話された。それだったら現地調達の方が楽でしょうと私が言うと、萩原先生は例の神妙な顔つきでニヤッとされ、当時は

世界中で5台しかまともに動く手作りのオシロスコープはなかったといわれた。そういえば、昔の論文で図のタイムスケールに（多分交流の）正弦波が入った図があり、少しいびつに見えたのもその所為だと、その時、初めて判った。この航海の途中で乗員の一人が病気になり、一番近い島に救助を求めると、その島は映画俳優のマーロン・ブランドの個人所有の島で、親切にも自家用機で運んでくれたとも言われた。

伝え聞くところによれば、ずっと昔には、学会の時に公開実験というイベントも存在したらしい。有名なのは活動電位の非減衰説と減衰説の対立であるが、当時でも一昔前の話であって、残念ながら、実体は把握していない。このような大きな実績も代が変われば、かなりあやふやになってしまふようだ。よく、歴史上の遺跡に関連して、忽然と姿を消した文明という表現があるが、よほど伝統を伝承しない限り姿を消してしまうのが「時の道理」ではあるまいか。

私の見るところ、最近の学会場でのシニアの存在密度が希薄なような気がする。シニア（年寄り）は、いくら若い人に嫌がられても、重石（？）として存在しなければならない。そう考えるのは私だけでしょうか？シニアは若い人に嫌がられても「昔はなァ、……」と思い出話をいい続けましょう。

できれば、生理学会の折にでも、各世代のシニアの人が昔の思い出話を自由に駄弁ることができるような機会を作っていただけると、各世代間での交流も進み、語られる話も意外な方向に発展し、面白いのではないかと想像しております。